
少年と閉ざされた家族の時間

clock

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少年と閉ざされた家族の時間

【Nコード】

N7375R

【作者名】

clock

【あらすじ】

少年は気がつくと一人になっていた。父も母もない、家もない、おもちゃもない。目覚めた場所は、前に父と母とピクニックに来たことのある街を見渡せる大きな丘だった。少年は、必死に家族を探し続ける……。どこにもいない家族、少年は何日も何日も探し続けた。再び気がついた頃には、他の子供の家族を羨むひとりぼっちの少年になっていた。

こうして、少年の果てしない悲しみに満ちた一人旅がはじまる……。

はじまり(前書き)

はじめまして。

clockと言います!!

小説をこういう大きなサイトに

upするのは初めてなので、

読みづらいかもしれませんがご了承ください。

ノートとかに小説を書いて、

自己満足していた人なので文章力とか

本当はないので、もしよけれなアドバイスください!!

はじまり

プロローグ

街中を真っ赤な光りを忙しく放ち、
けたましいサイレンを鳴らす消防車が走りぬける。
一つの小さな家が大きな炎に包まれていく。
まだ、消防車は到着しない。

炎は家を焦がしていく。

ゆっくり

ゆっくりと……。

それは誰の家？

ボクの家？

それとも、君の家？

あたりに人が集まり、ますます騒がしくなりはじめた。

誰かが声を上げてる。

「中に子供と妻がいます！！ 助けてください！！」

家の主人だろうか？

炎で燃え上がる家を指差し、必死に助けを求めている。

しかし、観衆の目はどれも冷たく、

他人事のように炎に包まれる家を見つめていた。

その様子を見た家の主人は、涙を流しながら駆け出した。

燃え上がる小さな家へと……。

それと同時に小さな家が崩れ落ちてしまった。

ボクはそんな様子をふわふわと上で見つめている。

どうして、助けないの？

何で……誰も……助けて……くれないの？

バラバラになつた家を未だ焼き続ける炎に

ボクは包まれ形を失った。

だ い ち ワ (前書き)

この物語ノ主人公、少年に八名前ガありマセン。

読者ノあナた自身ガ、

少年に名前ヲつけてあげテクださい。

物語ノ進行に影響しナイノデ、

名前をつけずに読み進めても構いマセン。

だ い ち わ

夏の心地よい風が頬に当たり、少年は目を覚ます。

「うっ・・・うっん」

今までボクは何をしていたんだろう？

少年は眠りから覚めたばかりのように体が重かった。

目を擦りながら、あたりを見わたす。

そこは少年の見覚えのある場所。

街を一望できる丘の上にある大きな木陰だった。

丘の上にある大きな木は特徴的で少年の記憶にしっかりと残っている。

少年の記憶がしだいに蘇る。

以前に父と母とピクニックに来たときのこと・・・。

楽しい一日、晴れていて穏やかな日。

木に父がブランコをかけたことを思い出す。

母のおいしい手料理・・・。

つい最近のことのような、ずいぶん昔のことのような・・・。

少年は、そんな不思議な感覚を味わう。

ふと少年は、あたりに父と母がいないことに気がつく。

いつも近くにいた父と母・・・。

その姿がどこにも見えない。

澄んだ空気を吸うと少年は大声で叫んだ。

「お父さーん！！ お母さーん！！」

しかし、聞こえてくるのは小鳥のさえずりと風が木々を揺らす音だけだ。

少年は一瞬にして不安に呑み込まれた……。

ついに耐えられなくなった少年は、

その場から駆け出し、必死に父と母を呼び続ける。

太陽が照らし、カラリと乾いた小道を少年が駆け抜ける。

川のせせらぎが心地よいが、今の少年にとってはどうでもいいことだ……。

名前を呼べばすぐに来てくれた父と母。その姿がどこにも見えないのだ。

しだいに涙が溢れ出す。

「お父さーん！！ お母さーん、どこー！！」

少年は気づかぬうちに涙と鼻水で顔をくしゃくしゃにしていた。

嗚咽をしばらくの間繰り返す、再び少年は父と母を探すため、歩き出した。

丘からはすでに遠く離れ、街に出た。

もしかしたら、ボクを置いて家に帰っちゃったのかな？

何となく少年はそう思った。

そう思うことによって、少年は少しでも自分に暗示をかけたかったのだ。

父と母はいる、この街にしっかりと今も住んでいるのだと……。

少年はそうして、すっかり泣き止んでしまった。

自分ひとりで家に帰るのは初めての少年。

しかし、しっかりと家までの道は覚えていた……。

よく母と歩いて街に買い物に出かけていたため、道順は分かっていた。

家の外壁が見えてくる。

いつもの外壁はそこに存在していたのだ。

少年の顔がいつきに晴れ、思わずその場から駆け出した。

「お父さん、お母さん!!」

ボクを置いていくなんてひどいよ!!」

そう言いながら、外壁から飛び出した。

しかし……

そこにいつもあるはずの家は……姿を消していた。

訳が分からず絶句する少年。

今まで家のあった場所は、さらちになっていたのだ……。

「えっ……？」

少年は何もない空き地と化してしまった自分の家の庭を歩き回った。

母がいつも世話をしていた、キレイな植物がすべてない。

父のお気に入りだったロッキングチェアもない。

少年が大好きだった、砂場も何もかも姿を消していた……。

「何で……？」

はっとした少年はあたりを見わたす。

「お父さん？ お母さん？」

どこ、どこに行ったの……！！

お家はどこ？」

再び少年の小さな瞳から涙が零れ落ちた。

そのまま少年はそこにうずくまり、泣き崩れてしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7375r/>

少年と閉ざされた家族の時間

2011年10月8日21時34分発行